

少し述べてみたい。

バグダードの街を歩いて何より驚いたのはすさまじい建物と道路の建設ラッシュである。主要道路の多くは砂ぼこりをあげてブルドーザーが動きまわり、ビル建設の大きな骨組がいたるところで瓦礫の上に立ち上っている。1983年秋にはアラブ諸国会議がこの地で開かれるとか、それまでに街並みは一変しますよと人びとは誇らしげにいう。外国人はただ感心するばかりである。

外国人からみてもう一つわからないのはイランとの限定戦争である。限定とはいってもはげしい戦争であり、毎日の新聞やテレビは生々しい戦闘の模様を報道している。それでいて一方ではバグダード市内で劇場やホテルをふくめた建設ラッシュがあり、夜の盛り場は人と光にあふれている。空襲の心配もないかのようなのである。少くも街を歩いて戦争の厳しさは感じられない。外国人同士は小声で、全く奇妙な戦争ですね、といいあっているのだが、イラクの人びとの真剣な愛国心に接すると迂闊な戦争批判もできない。

いずれにしても、バグダードに来て感じたことは戦争の背後にひそむイラクとイラン、というよりアラブとペルシアとの根づよい対抗意識である。単に経済的なものではない。歴史的、民族的な背景があり、宗教的対立がそれを一層複雑にする。日本からみていると同質に見えるアラブ文化とペルシア文化も当地に来るとたがいに異質なものとなるのである。

近代化されたバグダード市内では何がアラブ世界の本質であり、どこに伝統と現代との接点があるのか見きわめるのが難しい。例えば女性の黒いチャドルは現代化への象徴であろうか。若い女性はすでにチャドルを脱ぎす

て、年配の女性はチャドルを風にひるがえす。しかしどちらの女性もはや素顔をかくさない。

街のなかで伝統世界を代表するのは古いバザールの入りくんだ迷路と、そこに生活する“古きよき”アラビア人の陽気な姿であろう。バザールにはいままも金銀細工、銅細工からじゅうたん、衣料雑貨などの商品があふれている。ボーク先生と私はミス・アイダの案内でバザールの一角に入りこみ、アメリカ留学の経験もあるというじゅうたん屋の若い主人と話しあった。じゅうたんに埋れた狭い店頭で彼はアラブ世界という言葉をつたつた使った。狭くまがりくねった小路の片すみにあるこの店は近くの銅細工店からの銅板をたたきつけたまじい音と、絶えまなく行き交う人びとの混雑のなかで、日々の平安な営みをつづけていく。薄暗いバザールのなかでも妙に凄みをきかせる人種は見あたらないし、人びとは素直に定価で売買している。日本からやってきた私には人びとの素朴さがつよい印象として残った。それがアラブ世界の一端であろうか。爽やかな気持で私はバザールを出た。ボーク先生もガールフレンド(実は先生のお孫さんたち)へのお土産にじゅうたん織りのかわいいバッグを沢山買いこんで御満悦の様子であった。

天文学から大分脱線したが、今後の国際協力を進める上でアラブ人気質はぜひ理解しておきたい。考え方も習慣も大分われわれ日本人とは異っている、たがいにそれを理解したうえで交流を円滑にすすめたいと願うものである。

最後にイラク滞在中にお世話になったアル・ナイミ所長と ASRC の皆さんに謝辞をのべて筆をおきたい。

豆 辞 典

V.S.O.P.

高級ブランデーのラベルに見られるこの acronym を、ここでは天体力学・暦計算の部門での最近の労作である惑星暦の名称として紹介する。“Variations Seculaires des Orbites Planétaires”の略で、仏 Bureau des Longitudes の Bretagnon 女史が発表した。最近では、JPL をはじめとして各所で「数値積分法」による天文暦が利用される傾向にあるが、VSOP はその中において摂動論による「解析的」な立場を堅持している。各惑星の質量(冥王星を除く)の3次までの摂動を考慮し、約7万項の三角関数で与えられる。数世紀間の目標精度は内惑星 $0^{\circ}001$ 、外惑星 $0^{\circ}01$ となっている。数値積分法との比較でこれを検討してみると、内惑星ではかなり良く、外惑星ではいま一步となっている(天文学会 1981 年秋季年会予稿

集, B14, A16 参照)。

ところでブランデーの VSOP は何の略かと言うと、Very Superior Old Pale だということで、ランクは、☆☆☆クラスが3年物、VO~VSOP が5年、ナポレオン・エクストラ・ロイヤル・XO などが7年、さらにその上に、特別なガラス会社製のボトルに詰められその社名で呼ばれる「バカラ」などがあるとのこと。VSOP に勝る“NAPOLEON”という惑星暦が作れるかどうか。なお“Pale”というのは、古いブランデーが青みがかっているからだそうで、この点は「調査実費」不足でまだ確認していない。(中嶋浩一)